

広陵町立真美ヶ丘中学校

(様式 4-2 : 平成 29 年度モビリティ・マネジメント教育 (交通環境学習) にかかわる学校支援制度
実施結果報告書)

実施結果報告書

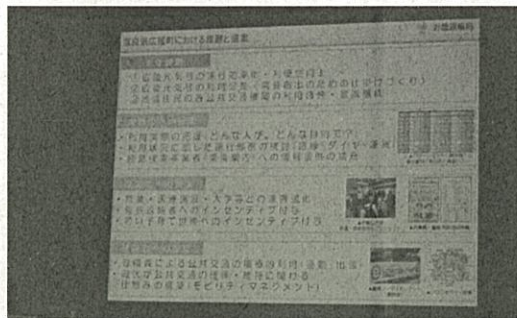
1. 学習名称 : 地域におけるモビリティ・マネジメント (交通環境学習)			
2. テーマ : 公共交通機関を利用した広陵町の観光事業活性化の提案			
3. 実施教科 : 社会科			
4. 関連単元 : 国と地域を結ぶ交通の役割			
5. 実施単元数 : 5 時間			
6. 学年	7. クラス数	8. 生徒数	
第 1 学年	5 クラス	1 6 8 名	
9. 実施内容			
(1) 研究授業 (平成 30 年 1 月 25 日 [木] 江上寿哉 教諭) 「公共交通機関を利用した広陵町の観光事業活性化の提案」をテーマにして、研究授業を行う。その後、四天王寺大学中本和彦教授を招いて研究協議を実施し、指導・助言をいただく。授業内容については、別紙学習指導案を参照のこと。			
(2) 広陵町交通シンポジウムへの参加 ①パネリストとして中谷昇 教頭が参加。 ②生徒代表がパワーポイントで説明の後、町長に真美ヶ丘中学校第 2 学年生徒の提案書を渡す。			
(3) 先進地視察 (高槻市・岡崎市など)			
(4) その他 ①交通関連図書の購入 ②消耗品等の購入			

10. 学習指導の流れ：別紙指導案及び添付資料を参考のこと

シンポジウム

広陵町・国土交通省・奈良県が協力して開催した「広陵町交通シンポジウム」にて、教頭がパネリストとして参加し、中学校におけるモビリティ・マネジメント教育について説明する。

真美ヶ丘中学校第2学年生徒代表3名が学習した成果をパワーポイントで説明し、その後、広陵町長に提案書を手渡す。



社会科授業

「公共交通機関を利用した広陵町の観光事業活性化の提案」をテーマにして社会科授業を行った。特に、広陵町から教育長・町づくり推進課長が授業を参観し、その後、四天王寺大学教育学部の中本和彦先生から指導助言をもらう。

生徒たちは班ごとに観光事業とコミュニティバス「広陵元気号」をどのようにしてタイアップさせたら良いか試行錯誤を重ね、最終的な提案に至っている。



社 会 科 学 習 指 導 案

日 時 平成30年 1月25日 (木) 第6校時
学 級 2年 3組34名 (男子17名、女子17名)
授業者・提案者 江 上 寿 哉
共同提案者 中 谷 昇

1. 単元名 公共交通機関を利用した広陵町の観光事業の活性化の提案 - 「モビリティ・マネジメント」の視点を手がかりにして -

2. 単元設定の理由

(1) 教材観

① 広陵町の交通事情とその対応

広陵町は奈良県北西部に位置し、すばらしい自然環境にも恵まれ、ほどよく商業施設も建ち並び、居住するには快適な町である。また、五位堂駅近郊の真美ヶ丘地区(本高校区)はニュータウンとして整備され、閑静な住宅街には40年近く前より大阪から流入した住民が居住し、近隣に点在する古墳群は史跡公園として整備され、今や住民の憩いの場となっている。

ところが、以前より指摘されているように、町内には鉄道の駅が近鉄箸尾駅しかなく、交通アクセスの悪さやバスの便数が少ないこともあって、実際通勤・通学の際には大和高田市にある近鉄高田駅、近鉄築山駅、香芝市内にある近鉄五位堂駅、JR五位堂駅・JR香芝駅まで家族が自動車で送迎してもらっている。奈良交通バスは真美ヶ丘ニュータウン(香芝市・広陵町)のエリアではアクセスは良いものの、その他の地域では十数年の間に廃線・減便が段階を経て実施され、特に免許証を返上し自動車の運転ができなくなった高齢者にとっては、病院や買い物、公共施設へ出かける際に、広陵町の交通事情は足かせとなってきた。

近年、広陵町行政が中心となって補助金を出し、廃線された奈良交通バスの運行ルートにコミュニティバスを運行させ、高齢者などの生活支援をしてきたものの、「空気を運んでいる」と揶揄されるように、なかなか採算が合うレベルで乗客を輸送することができず、デマンド方式を採用したり、運行ルートを変更したり、バスの大きさを変えるなど、試行錯誤を重ねてきた。また、定期的に町職員や関係機関にコミュニティバス利用促進を呼びかけるなど、地道な取組も進めている。さらに、「まちづくり推進課」が中心となって協議会を発足させ、昨年5月に「広陵町地域公共交通網形成計画」を策定し、平成33年度を目標達成年度と位置付け、現在さまざまな取組を進めている。

自動車での移動はきわめて便利な地域であるにもかかわらず、従来より町民の通勤・通学には課題が多く、皮肉なことに家族による近距離の送迎がかえって奈良交通バスの便数の減少や廃線に追い込んだりしている。また、行政がコミュニティバスを導入したものの、なかなか乗客数増加にはつながらず、頭を悩ませている。まさに真に「陸の孤島」たらしめている現状を改善し、高齢者を含めた地域住民すべてに優しい交通体系に

するためには、さまざまな諸施策が必要となろう。

筆者がめざす授業は、コミュニティバスを題材にして、平日においては町民の利便性向上による乗車率アップを、土日・祝日は観光客を呼び込む取組を、と考えている。今回、そのような提案を広陵町長に提案することが本授業の大きな目的の1つである。

② 「モビリティ・マネジメント教育」の視点

前述の本町の交通事情をふまえ、「社会科授業の中でコミュニティバスの利用促進を」と考えていたこともあり、今年度本校は「モビリティマネジメント教育実践校」に応募し、交通エコロジー・モビリティ財団より指定を受け、支援金をいただきながら、2年生を中心に社会科授業を進めている。また、支援金を使用して交通関連図書の整備、先進地域の視察、交通事業者・大学教授の招聘等を行い、少しずつではあるが生徒の意識も向上しているものとする。今回、1年間の「モビリティマネジメント教育」の集大成として、本社会科授業を提案することにする。「モビリティ・マネジメント教育」を提唱している藤井聡氏は、以下のように述べている。

<p>・さまざまな交通問題を引き起こしているのは、<u>私たち一人ひとりのふるまい(ライフスタイル)</u>である。だからこそ、それを変えていくことで、さまざまな交通の問題を解決していかなければならないのだという認識に立ち、さまざまな交通問題を解決していく取組</p> <p>・それぞれの地の交通を、<u>人と組織と社会の活力を通して、少しずつ改善していく取組</u></p> <p>・一人ひとりの移動や、<u>まちや地域の交通の在り方を、工夫を重ねながらよりよいものに改善していく取組</u></p>	該当部分を一部抜粋(下線は筆者)
---	------------------

「モビリティ・マネジメント教育」は生徒にとっても人ごとではなく、地域住民の一人として現在・将来の地域の交通事情を考えることは、きわめて重要なことである。まさにわれわれのライフスタイルそのものを抜本的に変えるためには、学校現場から授業を通して生徒の意識そのものを変えて行くことが求められているのである。

広陵町の交通事情は何も日本では例外と言える事例ではなく、近年、地方でのバス・鉄道路線の廃線・縮小は加速度的に進行している。また、都市部でも交通渋滞は深刻化し、ヨーロッパをモデルにした「パークアイランド」や「カーシェアリング」なども普及しつつある。

このような情勢の中で、国土交通省は自らが旗振り役となって、「モビリティ・マネジメント」を推進し、地方公共団体や交通機関にさまざまな働きかけをしている。国土交通省の下部組織である「地域公共交通支援センター」のウェブサイトにはモビリティ・マネジメントによる交通機関活性化の成功事例が多く取り上げられている。そのうち、近畿地方の小・中規模人口規模でのコミュニティバスの活用による成功事例として、表1の16件が掲載されている。

奈良県では、人口規模が小さいものの、以下の「吉野町」の事例が参考になる。特に、吉野町が進めている「バスツアー事業」は広陵町コミュニティバスの利用率向上の手立ての一つとして、検討するに値する施策ではないかと思われる。また、吉野町の事例は観光事業の活性化を図りたいと考えている本町行政の意向にも沿うもので、さらなる観光地発掘がコミュニティバスの利用促進を進めるためには重要な鍵となる。

【表1 吉野町のコミュニティバス】

<p>吉野町・・・人口7,632人（平成20年～） ○料金 400円（1日乗り放題）</p> <p>○目的 ①人口減少に伴い、路線バスの廃線・減便による空白地域の解消 ②買い物などのニーズに応える ③コミュニティバスとスクールバスの連携を図り、車両運用の効率化</p> <p>○市内7コースにおいて、コミュニティバスと通学バスの一体的な運行を実施</p> <p>○1コースにおいてデマンド型乗合タクシーを導入。（自宅～目的地）</p> <p>○平成27年度より川上村やまぶきバスと相互乗り入れ</p> <p>○バスツアー事業・・・平成24年度から、新たなコミュニティバスの利用促進として、地元のまちづくり団体と協働で「万葉歌碑めぐりウォーク」「大海人皇子ゆかりの地ウォーク」を企画実施。バスの定員の都合上1回20人の募集となったが、大阪や京都など県外からの参加者も多く好評で、平成25年度以降、全7回／年に回数を増やし、本町の観光資源を活用したツアーを実施している。</p>

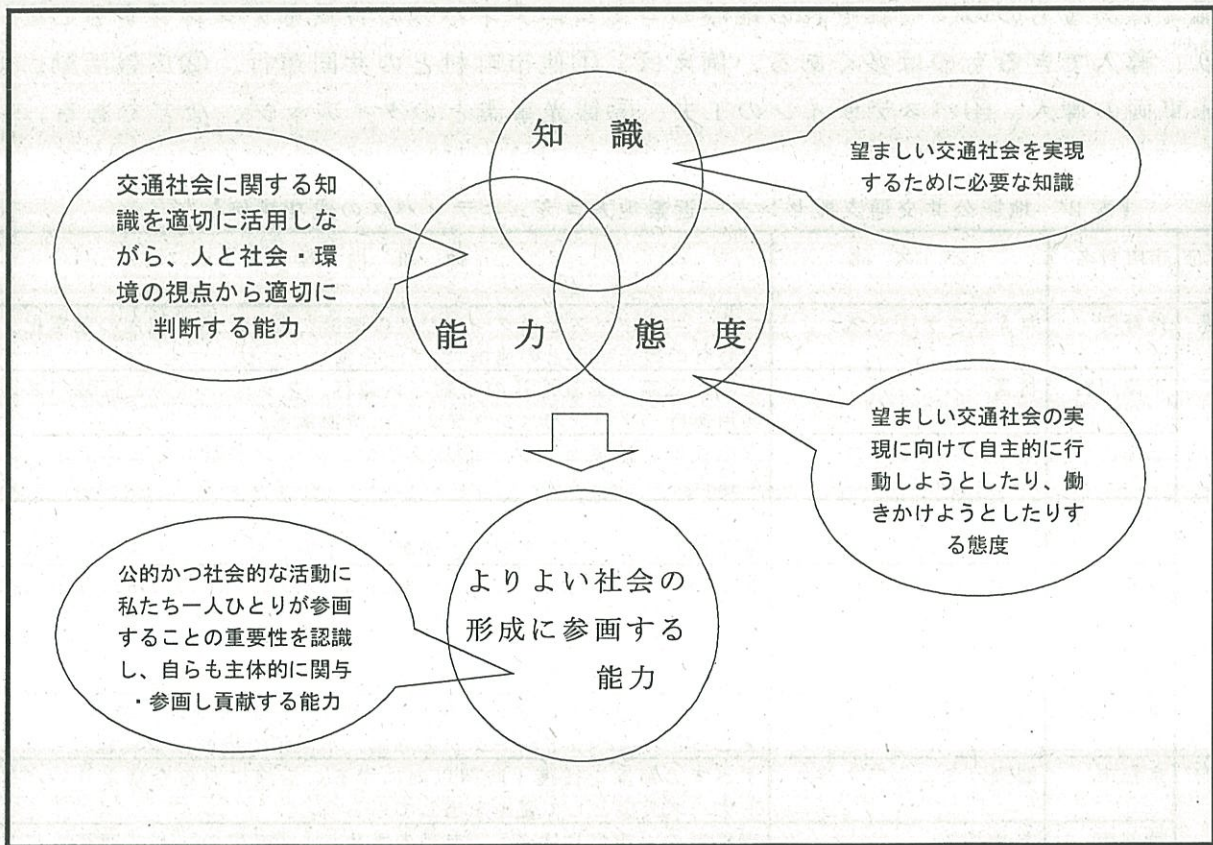
表2に掲載した近畿地方の成功事例のいずれかをそのまま広陵町にあてはめることは困難ではあるものの、それぞれの地域のコミュニティバスの長をアレンジすることにより、導入できるものは多くある。例えば、①他市町村との共同運行、②広報活動、③低床車両の導入、④バスデザインの工夫、⑤観光事業とのタイアップ、などである。

【表2 地域公共交通支援センター近畿地方コミュニティバスの成功事例】

都道府県名	市町村名	バス名	取組内容
奈良県	吉野町	コミュニティバス	コミュニティバスとスクールバスの連携を図り、車両運用の効率化。吉野町の観光事業との連携(ツアー企画)。
	十津川村	村営バス	十津川温泉一玉置神社の予約バス運行。スクールバスと村営バスの共用運行。ゾーンバスシステム。小荷物輸送。
	五條市	コミュニティバス	南奈良総合医療センター通院ライン。デマンド型コミュニティバスの運行。
和歌山県	みなべ町	みなベコミバス	ジャンボタクシー（10人乗り）を使用。3つの基本路線から外れた地域では、デマンド停留所を設置。年1回PRチラシを全戸に配布。
	日高川町	コミュニティバス	廃止バス路線に乗合タクシーを運行。時刻表・公共交通路線図、乗り継ぎ情報などのポスター作成。隣接する田辺市と一部共同運行。
滋賀県	草津市	まめバス	既存バス会社の大型バスが通れない細街路などにバスを走らせる。近隣の守山市、栗東市と共同運行。バリアフリー対応車両。
	東近江市	ちょこっとバス	「ちょこっとバスCM」を制作し、地元ケーブルテレビで放映。「ちょこっとバスヘッドマーク」を募集。小学校で出前授業実施。
京都府	京都市	醍醐コミュニティバス	すべての路線を往復1時間以内にする。沿線にある企業より、パートナーズ支援として資金を出してもらう。
	綾部市	あやバス	市独自の「市民による」「市民のための」「市民の」バス運行。バスターミナルを設置し、病院や商店街へ高齢者を運ぶ。
	舞鶴市	自主運行バス	ユニバーサルデザイン化（シニアカー・車いすを収容できるリフト付車両の導入）。協議会による運行ルートやダイヤの決定。環境負荷車両（バイオディーゼル燃料を使用した車両）の導入。
兵庫県	神戸市	住吉台くるくるバス	全国都市再生モデル事業で社会実験開始。高齢者を意識したノンステップ・車いす対応の小型バス導入。住吉台くるくるバスを守る会。
	篠山市	ハートラン	廃止代替バス、スクールバス、乗合タクシーの運行を路線に応じて導入。自治会が乗合タクシーの維持費を捻出。園部町との共同運行。
	豊岡市	イナカー	利用者の多くは小中学校への通園・通学利用。車両の小型化。デマンド運行の導入。「イナカー」とすぐわかる車両デザインの工夫。
	明石市	Taco(たこ)バス	3形態のバス（中・大型バス、小型バス、ジャンボタクシー）。チラシの各戸配布。転入者への試乗券の提供。オリジナルグッズの販売。
	加古川市	かこバス	運行時間の幅が大きい（6時～22時）。ICカードの利用が可能。利用促進のためのPRや新聞広告、市の広報誌での情報提供。
	西宮市	ぐるっと生瀬	「ぐるっと生瀬」運行協議会によるコミバス運営。利用状況を毎日ホームページや車内に掲載。

交通エコロジー・モビリティ財団は、さらに進む高齢社会に向けて、地方公共団体・地域の交通機関・地域住民が一体となってコミュニティバスなどの運行を維持する必要があると考え、学校現場と連携して授業実践を行ったり、交通事業者がゲストティーチャーとして小・中学校を訪問したりする事業を展開している。

小中学校で授業をするにあたり、交通エコロジー・モビリティ財団では、児童・生徒が身に付けることができる力として「モビリティ・マネジメント力」を挙げている。これは、最終的に児童・生徒が知識・能力・態度の3つの要素を土台にして、「よりよい社会の形成に主体的に参画する能力」を育成することをめざしている。単に交通問題に対して自分の意見を述べるというのではなく、そのことがひいては地域社会の課題解決にもなり、自分も含め地域住民全員が地域社会の問題に関わる必要があることを指摘しているものである。以下に示す。



【図1 モビリティ・マネジメント力】

図1の「モビリティ・マネジメント力」を育成するために、モビリティ教育では、以下の「地域の公共交通」、「交通まちづくり」、「クルマ社会」、「モノの流れ」という4つの内容領域が考えられている。それをもとにして、藤原孝章氏が現在の交通問題とその原因、対策を整理したものが表3である。社会科授業の構想としては、この4つの内容領域を想定しながら、単元を編成していくことが求められる。

「対策」の欄には広陵町のコミュニティバスの利用促進につながるヒントも多く挙げられており、本町の計画目標達成年である平成33年に向け、広陵町民あげて地域まるごとでライフスタイルの転換を図る時期に来ていることは言うまでもない。

【表3】相互に関連した原因結果となる4つのテーマ：問題・原因・対策（例）

	問 題	原 因	対 策
地域の公共交通	・公共バス、路面電車や地方鉄道の路線の縮小・減少	・自家用車の普及	・コミュニティバスの普及、地方私鉄の再生 ・路面電車の復活やライトレールの普及
交通町づくり	・中心商店街の衰退 ・スーパーの縮小・撤退	・集客力の低下 ・地価や駐車料金の高騰	・まちづくり三法による市街地活性化（空き店舗カフェ、共同売店、手作りスーパーなど） ・文化遺産、イベント、観光などを通じた交流人口の拡大
クルマ社会	・車がない人は歩いて買い物に行くのに20分も30分もかかる ・子どもが路地裏で遊べなくなった。	・車があれば郊外店の方が便利、品ぞろいが豊富で大量に買える ・クルマ優先の考えによる道路建設、整備	・中心市街地への集住 ・地産地消、朝市の充実 ・歩行者優先の道路（路地）とその活用 ・消費によるフードマイレージやバーチャルウォーターの意識化
モノの流れ	・郊外型ショッピングセンター、コンビニが普及した ・輸入食品を含め大量の消費のための流通ができてしまった	・高速道路の発達 ・海外からの輸入食材の増加、食料自給率の低下	

③ 「学習指導要領解説 社会編」での位置付け

本研究は「モビリティ・マネジメント教育」の一環として位置づけられて進めてきたものではあるが、ここでは、平成20年版学習指導要領解説での位置づけを明確にしておく。

授業対象にしている本単元は、以下の中学校学習指導要領解説 社会編「2内容(2)日本の様々な地域イ・エ」に位置付けられる。今回筆者が構想する授業では日本と世界の交通について学習した後、本町の地域的課題（陸の孤島）である交通問題を取り上げることから、「広陵町」を対象地域とする。また、地域住民の利便性の向上と観光事業の活性化をコミュニティバスの活用方法から考える特設単元を構成し、「イ・エ」の内容を再編成する。

<p>イ 世界と比べた日本の地域的特色 (エ) 地域間の結び付き</p> <p>世界的視野から日本と世界との①交通・通信網の発達の様子や物流を理解させるとともに、②国内の交通・通信網の整備状況を取り上げ、日本と世界の結び付きや国内各地の結び付きの特色を大観させる。この小項目は、我が国の地域的特色を地域間の結び付きの面から理解させることを主なねらいとしている。</p> <p>エ 身近な地域の調査</p> <p>身近な地域における諸事象を取り上げ、観察や調査などの活動を行い、生徒が生活している土地に対する理解と関心を深めて③地域の課題を見だし、④地域社会の形成に参画してその発展に努力しようとする態度を養うとともに、市町村規模の⑤地域の調査を行う際の視点と方法、⑥地理的なまとめ方や発表の方法の基礎を身に付けさせる。</p>

(2) 生徒観

本学級の生徒は、教師の指示をしっかりと聞いて的確に作業を進めることができる。また、普段から丁寧に板書を写したり、教師の発問に対して積極的に発言をするなど、真面目に授業に取り組むことができる。しかし、地図やグラフなどの統計資料を読み取り、自分の意見をまとめることを苦手としている。

入学当初から、そういった傾向が社会科の授業において見られたことから、自分の意見をノートに端的にまとめる機会を計画的・継続的につくり、根拠をもって自分の意見を整理し、文章にまとめることが少しずつできるようになってきた生徒も多い。しかし、読図・作図といった地理的技能の育成という観点からいくと、まだまだ力不足の感は拭えない。そこで、本単元を通して、広陵町のコミュニティバスを題材とし、生徒の「表現」力の育成を図りたい。

(3) 指導観

本単元の第一次では、日本航空（JAL）が学校教育用として制作したDVD教材である「Global Navigation」を活用する。まず、第1時では海上輸送と航空輸送のちがいや、それぞれの輸送手段がもつ課題について考えさせる。また、輸送が地域全体や社会にどのような影響を与えるかという点にも踏み込んで意見を述べさせる。さらに、学習したことをもとに、「交通の発達と地域社会の結びつき」について、根拠を明らかにして説明文を書かせる。

第2時では、まず距離の違いによる交通手段の利用の特色を考えさせる。次に日本の交通における時間的距離短縮のスピードの早さと、「安全性」「定時性」「快適性」を追求している日本の交通事情について意見交換させる。最終的には、日々交通を支えている公共交通機関の役割やそれに携わる人々の努力や工夫にも目を向けさせる。

第二次の第1時では、コミュニティバス「広陵元気号」関連の統計資料や運行ルートなどから、コミュニティバス運行上の課題と解決策を探らせる。また、広陵町の交通面の課題を解決する手立ての1つとして広陵町内に点在する観光地を拾い出し、それらをコミュニティバスで線をつなぐ方法を考えさせる。

第2時では、他地域（近畿地方）のコミュニティバスの成功事例を概観し、広陵町に応用できる施策を拾い上げる。また、それをもとにコミュニティバスの活用方法を広陵町長に提案する内容について班単位で考えさせ、根拠を明確に記述させる。

第3時では、前時の内容を班ごとに発表させ、意見交流するとともに、どの班の提案が現実的かも含めて意見を問う。また、他班の意見を聞いて、さらによりよい施策に修正を図る。

第4時では、修正案を整理するとともに、観光事業とタイアップしたコミュニティバスの運行ルートを具体的に考えさせる。

3. 単元の指導計画と評価規準（全6時）

		社会的事象への 関心・意欲・態度	社会的な 思考・判断・表現	資料活用の技能	社会的事象について の知識・理解
第一次 国と地域を 結ぶ交通の 役割	第1時 広がる 世界の 交通		○交通の発達によって日本や世界がどのように結びついているかを考察することができる。		○世界的視野から日本と世界の交通の発達の様子や物流の実態をとらえることができる。
	第2時 日本の 交通と 交通の 安全			○「交通の時間的距離の発達」について、本州四国連絡橋を事例に地図や統計資料から読み取らせる。	○国内の交通の整備状況を捉えるとともに、交通の発達が人々の生活にどのような変化を与えているかについて、その結果を理解できる。
第二次 コミュニティ バスを 活用した 観光事業	第1時 広陵町の 現状と 課題	○広陵町全図から、広陵町が抱えている交通上の課題である「陸の孤島＝鉄道の駅が1つ、奈良交通バスの路線が少ない」という問題を発見し、関心を持つ。		○コミュニティバス関連の統計資料から、「広陵元気号」維持・運行上の課題を拾わせる。	
	第2時 他地域の 先進的な 取組		○近畿地方のコミュニティバスの成功事例をもとにして、広陵町に導入できる施策を考えさせる。		○過疎化がすすむことにより、地方の鉄道の廃止やバス路線の廃線・減便などが続き、交通アクセスの悪さから、空白地域に共通して地方公共団体がコミュニティバスを走らせていることを知る。
	第3時 第4時 コミュニ ティ・ バスを 存続さ せるた めに	○高齢社会において、病院や買い物に出かける際にコミュニティバスは必要不可欠なものであるということに気付く。	○広陵町の課題を踏まえた上で、広陵町長に提案できる実現可能な改善策及びコミュニティバス活用案を提案する。		

4. 学習指導過程

第一次「国と地域を結ぶ交通の役割」 第1時 「広がる世界の交通」

過程	学習内容	主な発問と 予想される生徒の反応	指導上の留意点	資料
導入	○交通手段	○みなさんが知っている輸送手段をあげてみよう。 ・自転車 ・バイク ・自動車 ・船 ・航空機	・できるだけ多くの交通手段を挙げさせる。	☆近鉄電車
展開	世界と日本の交通はどのように結びついているのだろう。			
	○DVD視聴	○DVDを視聴して、気付いたことをメモしよう。 ・ ・	・メモをとりながら、以下の2点に気付かせる。 ① 海上輸送と航空輸送の違い ② 航空輸送の重要性	☆DVD「Global Navigation」
	○海上輸送と航空輸送のちがい	○海上輸送と航空輸送のメリット・デメリットを考えよう。 航空輸送 ・早く目的地に運べる ○ ・運ぶ量に限りがある × ・運賃が高い × 海上輸送 ・目的地まで時間がかかる × ・一度に大量のものを運べる○ ・運賃が安い ○	・海上輸送、航空輸送のメリット、デメリットを把握し、2つの輸送手段をどのように使い分ければよいか考えさせる。	☆JALの飛行機 ☆タンカー
	○日本を訪れる外国人の増加	○なぜ、いずれの観光地に行っても中国、東南アジア諸国出身の外国人が増加しているのだろう。 ・格安航空機(LCC)の増便 ・日本の旅行社による誘致活動 ・円安の進行 ・海外における日本文化の普及とメディアによる伝播	・近年、日本を訪れる外国人が増加している原因を考えさせる。	☆来日する観光客数の変化
○輸送の発達と地域・社会	○モノ・人の輸送の発達によって、身の回りで大きく変化したこととして、どのようなことがあるだろう。 ・外国人観光客の増加 ・輸入品の増加 ・地域に外国人の居住が増えた ・外国料理の店の増加 ・外国文化の流入(ハロウィン) ・外国家具・外国電気製品)	・日本には企業で働くのみならず、多くの観光客が訪れ、日本文化に触れる機会を持っていること、今や外国人抜きには日本の観光業は成立しないことにも触れる。	☆IKEA、ムーミン、ベンツ、ダイソン、ユニバーサルスタジオ	
まとめ	○まとめ	○ワークシートに整理しよう。	・ワークシートに学習したことをまとめさせる。	☆ワークシート
<p>【問いの答え】 ○世界と日本の交通は海上輸送・陸上輸送で結ばれている。その輸送によって、人・モノが頻繁に行き来している。また、近年グローバル化が急速に進展し、外国人観光客の流入数が激増し、もはや日本企業の戦略も外国人抜きには考えられなくなっている。身近になってきている外国文化は、世界と日本を結ぶ海上輸送・陸上輸送によって日本にもたらされ、今や人・モノはリアルタイムで移動し、インターネットの普及に伴う情報の伝播も含め、世界と日本はすべての面で一体化してきている。</p>				

第一次「国と地域を結ぶ交通の役割」 第2時 「日本の交通と交通の安全」

過程	学習内容	主な発問と 予想される生徒の反応	指導上の留意点	資料
導入	○日本の交通手段利用の特色	○船、自動車、鉄道、航空機といった交通手段をどのように使い分けているのだろう。 ・近距離・・・自動車 ・中距離・・・鉄道 ・遠距離・・・船、航空機	・距離に応じて交通機関の利用にどのような違いがあるか、考えさせる。	☆西名阪自動車道 ☆京奈和自動車道
日本の交通の発達は人々にどのような変化を与えているのだろう。				
展開	○DVD視聴	○DVDを視聴して、気付いたことをメモしよう。 ・ ・	・メモをとりながら、以下の2点に気付かせる。 ① 距離によって交通手段を変えていること ② 交通機関は、安全性、定時性、快適性を重視した運行をしていること	☆DVD「Global Navigation」
	○航空会社の役割	○航空会社はどのような点に気をつけて運行しているのだろう。 ①安全性・・・点検、整備の徹底 ②定時性・・・時間厳守 ③快適性・・・室内空間の工夫	・航空各社で働いている人たちの工夫や努力について知る。	☆DVD「Global Navigation」
	○日本の交通網と移動距離	○みなさんなら、交通手段をどのような点を基準にして使い分けるのだろう。 ・安全性 ・定時性 ・快適性 ・価格・サービス ・移動時間 ・目的地までの距離	・利用者は必ずしも①～③のみで交通機関を選択わけではないことに気付かせる。	☆ワークシート
	○世界の交通と日本の交通	○世界の交通と日本の交通で学んだことを、ワークシートに自分の言葉で整理してみよう。	・人、モノの移動のみならず、インターネットを使った情報の移動がリアルタイムで行われていることに触れる。	☆OK グーグル
まとめ	○まとめ	○ワークシートに整理しよう。	・ワークシートに学習したことをまとめさせる。	☆ワークシート
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>【問いの答え】 ○日本全国に張り巡らされた高速道路、新幹線の広域化に伴う高速鉄道、タンカー・大型客船などの海上輸送の発達などにより、日本の交通はめざましく発達した。人々は交通の発達に伴い、輸送手段を代えたり、交通機関を選択したりできるようになってきている。そのことが、企業間の競争を生み、さらに安全性・定時性・快適性を求める人々のニーズと合致し、さらに交通の発達を後押ししている。</p> </div>				

第二次「コミュニティバスを利用した観光事業」 第1時 「広陵町の現状と課題」

過程	学習内容	主な発問と 予想される生徒の反応	指導上の留意点	資料
	○ 広陵町の交通網	○ 町内の交通網には、どのようなものがあるだろう。 ・ 奈良交通バス ・ 近鉄電車（箸尾駅） ・ コミュニティバス（広陵元気号）	・ 町内に駅が1つしかないことや奈良交通の路線図を見て広陵町に陸の孤島となっている地域があることを確認させる。	☆ 奈良交通、 ☆ 広陵町内路線図
	○ 「広陵元気号」について	○ 「広陵元気号」は知っているか、また、実際に乗車したことはあるか。 ・ 知っている ・ 知らない ○ 「広陵元気号」を利用したことはありますか。 ・ 利用したことはない。 ・ 数回、乗ったことがある	・ 交通機関が廃止されてしまった空白地域を補うために「広陵元気号」が投入されていることを確認させる。 ・ 「広陵元気号」のさまざまなデータを見て現状を確認する。	☆ 「広陵元気号」路線図 ☆ 「広陵元気号」認知状況
<p>「広陵元気号」を充実・維持するために、どのような取組が行われているのだろう。</p>				
	○ 「広陵元気号」の運営・維持	○ 利用率が低いにもかかわらず、「広陵元気号」の充実、維持を望む声が多いのだろう。	・ 高齢者の足として、「広陵元気号」欠かせないことを確認させる。	☆ 「広陵元気号」の運営・維持費用
	○ 「広陵元気号」の課題	○ 広陵元気号にはどのような課題があるだろう。 ・ 利用率の低さ ・ 知名度の低さ(20代) ・ 運行本数の少なさ	・ 広陵町が出しているデータをもとにコミュニティバスの課題を出させる。	☆ 「広陵元気号」利用者数
	○ 課題の解決方法	○ コミュニティバスの課題を解決するために広陵町はどのようなことを行っているのだろう。 ・ 「広陵元気号」の有料化 ・ 観光客向けのパンフレットの作成 ・ モバイルサイトへの情報提供 ・ 観光イベントの実施	・ 広陵町が出しているデータをもとに課題の解決方法について説明し、確認させる。	☆ 「広陵元気号」利用者の年代別利用状況、目的
	○ 広陵町の観光地	○ 広陵町にはどんな観光地があるだろう。 ・ 古墳 ・ ナス農園 ・ 靴下工場の見学 ・ かぐや姫	・ パンフレットを見ながら、広陵町の観光地として活用できる場所を拾わせる。	☆ 広陵周遊
	○ まとめ	○ ワークシートに整理しよう。	・ ワークシートに学習したことをまとめさせる。	☆ ワークシート
<p>【問いの答え】 ○ 広陵町は県北西部にあって大阪にも近く、通勤・通学するには最適な立地条件にある。その反面、近鉄の駅が箸尾駅しかなく、奈良交通バスのアクセスも悪く、公共交通機関が通っていないエリアが多く、コミュニティバスがそれを補っている。しかし、実際は家族による自動車送迎や自動車通勤が多く、コミュニティバスが空気を運んでいる状態になっている。そこで、広陵町行政は観光地を発掘するとともに、コミュニティバスの利用率向上に向け、さまざまな施策を考えている。</p>				

第二次「コミュニティバスを利用した観光事業」第2時 「他地域のコミュニティバス」

過程	学習内容	主な発問と 予想される生徒の反応	指導上の留意点	資料
導入	○前時の復習	○「広陵元気号」にはどのような課題があったか。 ・知名度が低い(20代) ・利用率の低さ ・運行本数の少なさ	・「広陵元気号」の現在の状況について再確認させる。	
展開		○課題を解決するために広陵町が考えていることは何か。 ・コミュニティバスの増便 ・観光ルートの開発やイベントの実施 ・町民や観光客向けのパンフレットの作成 ・コミュニティバスの有料化 ・モバイルサイトへの情報提供	・町行政も課題解決の方法を試行錯誤していることを知る。	☆モバイルサイトへの情報提供(本年1～3月まで、駅すばあと・NAVITIME等で実証試験)
	広陵町コミュニティバスの利用促進策として、他地域のどのような事例を取り入れたらいいのだろう。			
	○広陵町の観光地	○「広陵元気号」広陵町にはどんな観光地がありますか。 ①古墳…牧野古墳、巢山古墳 ②かぐや姫…讃岐神社、まつり ③祭…戸閉祭、立山祭 ④食事、宿泊、朝市…はしお元気村、グリーンパレス ⑤その他…環濠集落、百済寺	・前回確認した観光地について、再度確認させる。	・広陵周遊
○県内他地域(吉野町)の取組	○吉野町・日高川町・東近江市はコミュニティバスを維持・充実させるためにどのような取り組みを行っているのだろうか。 ・吉野町…観光ツアー ・日高川町…隣接市との共同運行 ・東近江…CM政策	・各グループで話し合い、広陵町に導入できるものを考える。	☆他地域の事例(近畿地方の成功3事例)	
○広陵町のコミュニティバスを維持・充実させるために	○広陵元気号を維持・充実させるために、どのような政策を行う必要があるのだろうか。	・他の事例を参考に、広陵町に導入できるものを地域に合ったアレンジ・補強するとともに、新たな策を考えさせる。	☆ワークシート	
【問いの答え】 ○広陵町には観光地があるにもかかわらず、観光地が点在しており、観光ルートとして線で結ばれていない。そこで、他地域のコミュニティバスの成功事例(吉野町を含めた3事例)ををもち、広陵町に応用可能な施策を導入することにより、観光地を点から線へ発展させ、コミュニティバスの利用率を向上することができる。				
まとめ	○まとめ	○ワークシートに整理しよう。	・次回、政策について発表することを伝え、発表の内容についても考えさせる。	☆ワークシート

第二次「コミュニティバスを利用した観光事業」第3・4時 「コミュニティバスを存続させるために」

過程	学習内容	主な発問と 予想される生徒の反応	指導上の留意点	資料
導入	○ 広陵町のコミュニティバス利用率向上の取組	○ 広陵町のコミュニティバスの利用率向上の取組について、前時に話し合った提案内容を発表しよう。 ○ 提案内容について、優れている点や改善を要する点を発表しよう。	・ 根拠を明らかにして、コミュニティバス利用率向上の手立てを提案する。 ・ 各班の意見を交流し、優れている点、改善すべき点を考えさせる。	☆ ワークシート
展開	「広陵町元気号」を維持・充実するために、どのような取組を行う必要があるのだろうか			
	○ 「広陵町元気号」を活かした観光事業	○ みなさんから指摘してもらったことを参考に、「広陵町元気号」をさらに維持・充実させるために、どのような政策を行う必要があるだろうか。 ・ ナス農家を観光農園化して、そのエリアをまわる ・ 古墳をつなぐルートをさぐる ・ かぐや姫伝説地をまわる ・ 「道の駅」に寄るルートを作り、靴下等の特産品を売る ・ ボランティアガイドによる歴史散歩ルートを作り、連携する	・ コミュニティバスの利用率を上げるためにどのような観光事業を立ち上げればよいか考えさせる。	☆ 広陵周遊 ☆ コミュニティバスの運行ルート
	○ 平日の「広陵町元気号」の活用法	○ 土日や祝日はともかく、平日にコミュニティバスをどのように活用すればいいのだろうか。 ・ 高齢者の利用促進 ・ 役場職員の利用 ・ 通勤、通学への利用	・ 「空気を運ぶ」と揶揄されることなく、平日の乗車率をアップできる方法を考えさせる。	☆ コミュニティバスの利用率
	○ 町長さんへの提案	○ みなさんの指摘を受けて自分たちが修正して考えた案について、再提案しよう。	・ 各自で、観光地とリンクするように、コミュニティバスの運行ルートを考えさせる。	☆ ワークシート
まとめ	○ まとめ	○ ワークシートに整理しよう。	・ ワークシートに学習したことをまとめさせる。	☆ ワークシート
<p>【問いの答え】</p> <p>○ 広陵町の観光地をまわるプランを作成することにより、観光地が点から線、やがて面へと発展し、コミュニティバスの利用率が向上することを考えさせる。また、平日の利用率向上策として高齢者サービスの充実や通勤・通学での利用促進も必要であることを理解させる。</p>				

【主な参考・引用文献】

(1) 使用教科書

日本文教出版「中学社会 地理的分野」

(2) モビリティ・マネジメント教育関係資料

日本航空株式会社「Global Navigation」

唐木清志・藤井 聡編著「モビリティ・マネジメント教育」東洋館出版社

藤井 聡・谷口綾子・松村暢彦編著「モビリティをマネジメントする」学芸出版社

国土省地域公共交通支援センター「コミュニティバス成功事例」

(3) 広陵町関係資料

広陵町「広陵町地域公共交通網形成計画」

広陵町「広陵町公共交通総合時刻表」

広陵町「広陵周遊」

【高評欄】

--